

建築文化賞

一般建築物

建築主：山武市

設計：株式会社竹中工務店

施工：株式会社竹中工務店

所在地：山武市白幡1919番地

自然災害が生んだ統合幼保施設の形と環境

山武市立しらはたこども園



全景俯瞰 園舎中央の屋上広場が津波避難スペースとなる

(撮影/勝田 尚哉)

3.11の津波に近隣の九十九里海岸も洗われた。近い将来想定される大規模な自然災害から、未来の日本を担う子どもたちの生活空間をどう守るのか。悩ましい現代的な課題である。千葉県山武市は地域の4つの幼保施設を移転・統合し、より内陸の安全な場所に建てることに決めた。一つの選択肢に違いない。三陸海岸の被災地における住宅の高所移転も同様である。どちらの場合もそれによって新たな問題も起こる。前者の場合は自宅から遠距離になることの通園やコミュニティからの疎遠化であり、後者の場合は住まいと漁業のような沿岸型生業との距離と利便性である。

しかし、行政が選択したそのプログラムを受け入れた上で、プロポーザル・デザインビルド方式の選定に対して、どのように建築的に応えるのか。ここではそれが問われた。前提条件として畑地に囲まれたのびやかで安全な敷地を与えられ、設計者は直線と曲線を巧みに幾何学的に組み合わせることで、利用

者にわかりやすく印象的な形を提案した。そして、屋外の中庭と屋内の中庭的なホールを抱き守るかのようになり、その周囲に幼児の生活空間をゆったりとしたスケールで配置した。そのせいか、ややスケールアウトな印象を否めないが、その分自然光が溢れ、自然換気の工夫に依拠する明るく、健康で、心地よい室内環境が達成されている。

一方、RCの主体構造を覆う地域産の木材「山武杉」等を多用した内装の木質系テクスチャーは柔らかい。こうして、災害と環境に配慮した取り組みが、地域の中で持続的に成立しうる一つのモデルとして表現された。(岩村 和夫)



園の中心となる遊戯室



園児たちの活動の場となる屋上広場